

「失われた2年半」を取り戻す

アジア酪農交流会 前会長 發地 喜久治

新型コロナウイルス感染症の拡大からすでに2年半が経過した。2020年1月28日に北海道内で初めて感染者が確認され、同年2月28日道独自の緊急事態宣言の発令（同年3月18日終了）に至った当時は、大変な事態になったと思いつつも、どんなに長くても1年以内に収束するのではないかと楽観的に受け止めていた。

1月末でその年度の授業が終了していたので、何とか乗り切れるとも考えていた。しかし、道や国による感染症対策が進められる中で、4月から始まる新年度の授業は全て遠隔方式に変更された。

三密を避けるため、課外活動は原則禁止となり、一時期学生が大学に登校できなくなる状況も生じた。その後、適切な感染対策に留意しつつ、少人数の授業から対面方式に戻すようになり、現在では実習も含めてほとんどの授業がキャンパス内で実施されている。しかしその間、課外活動を自粛した時期もあり、学生の大学生活は大きな影響を受けた。「失われた2年半」とでも言えるような困難な時期であった。

授業を担当し、学生を指導する教員の教育活動も大きく変化することになった。特に遠隔授業を行うためには、大学の学内LANを通じたeラーニングとインターネットの整備が不可欠となる。幸いにも酪農学園大学では、教育センターを中心にeラーニングシステムの強化が図られた。ITが苦手な教員に対するサポート体制も構築されたため、大きな混乱もなく大学全体として遠隔授業に移行することができた。

一方、学生は自宅で授業を受けるためにスマホやパソコンが必要となる。しかし、パソコンは全員が持っ

ているわけではなく、新たに購入しなければならない者もでてくる。そのため、酪農学園大学では学生のパソコン購入費の一部を補助する対策も実施された。

さて、私は2020年3月末に28年間勤めた酪農学園大学を定年退職し、同年4月から非常勤講師を拝命し、キャリア関連の複数の科目を担当している。この授業は学生のキャリア形成（進路決定）支援のためのプログラムとして、本学のキャリアセンターと農食環境学群の各学類の教員チームが協力して実施している。

キャリア形成をサポートする会社の第一線で活躍している方々や本学の卒業生をゲスト講師として招くこともあり、実践的な学びの場となるよう工夫している。

この授業も一時期は遠隔方式であったが、現在は大人数の場合を除き対面授業として大学の教室で実施されている。

学生の就職活動でも、直接面談や実際に職場に入るインターンシップが復活しつつある。まだ困難な状況が続いているが、本学においても「失われた2年半」を取り戻す努力が着々と進められている。

さて、アジア諸国の農業関係者の「友好親善を促進し、併せて青年農学徒の育成に協力することを目的とする」本会の活動も、この間大きな制約を受けてきた。従来のような対面式の交流を十分に展開できないまま呻吟する状態が続いた。

しかし、すでに大学のキャンパスも落ち着きを取り戻しつつあり、本会がその動きに歩調を合わせつつ、新たな活動を展開していくことを期待している。

CONTENTS

| | |
|----------------------------------|------------------------------|
| 「失われた2年半」を取り戻す……………發地喜久治… 1 | 将来の目標……………LIN PAO CHUN… 10 |
| 「三愛精神」よ いつ迄も……………細田 治憲… 2 | 2019年度の主な事業（報告）…………… 12 |
| 2020年度の留学生支援について……………横川 容子… 3 | 事務局報告…………… 13 |
| 留学生交流会の実施報告……………亀岡 笑… 4 | 2019・2020・2021年度決算報告…………… 13 |
| 酪農学園大学留学生から | 寄付者ご芳名…………… 13 |
| 日本留学の目的……………NUMPADIT SUPAPORN… 6 | 役員名…………… 14 |
| 日本での思い出と頑張っていること | 編集後記…………… 14 |
| ……………YALEGEMU… 8 | 規約…………… 14 |

「三愛精神」よ いつ迄も…

アジア酪農交流会 顧問
由仁町 酪農家

細田 治 憲

令和3年1月吉日

酪農学園は酪農義塾から数えて間もなく90の年輪を積み重ねようとしています。創立者の黒澤翁と関係者、教職員、後援者その他多くの関係者皆様のご尽力とパイオニア精神に心から感謝と敬服の念を申し上げます。

酪農学園の建学理念は、三愛精神、健土健民、実学教育にあります。酪農学園という三輪車を想定してみてください。前輪は舵取り役、建学の理念に基づく執行理事、役員。左車輪は卒業生、企業、団体、組合他後援者。右車輪は教育の現場、教職員、学生、学習施設、寮、ゼミナール、部活動等を想定してみてください。三輪が程良く調和したので今日の酪農学園が存在するのだと思います。とりわけ教職に従事された皆様の果たした役割は甚大で、その功績は計り知れません。教職員一丸となって学生達と切磋琢磨して頂いたことに心から感謝申し上げます。教育現場で忘れられない個性的な先生や指導者の方々の事も思い出します。学生に建学の精神を力強くアピールした先生が多く居りました。その中でも樋浦誠先生の存在は偉大だったと思います。機農高等学校、短期大学、酪農大学、短大2コースの創設や三愛塾等に深い関わりを持った学長であり、科学者であり、三愛精神教育の実践的指導者で、敬虔なキリスト者でした。そして自ら先頭に立ち、理論と実際が一致することを目指した実学教育の実践者で、当時の教職員や学生に及ぼした影響力は計り知れません。個性が強すぎて批判や反発も多かったが、草創期におけるパイオニアの宿命であったかもしれません。樋浦先生の足跡と人柄は善し悪しにつけ、酪農学園で教職に従事する皆様の参考書であってほしいと願うものです。

時代が推移し、人が変わってもマンモス化した現在、酪農学園の「命」である「三愛精神」の継承は、学生諸君に対して誰がどの様に受け継いで行くか！教職に従事される皆様の意識と自覚と責任が問われています。勿論卒業生の果たす役割も大きい。教育という事業は執行理事・役員と教職に従事する方々、そして学生諸君、この三者の人格的交わりを通じたコミュニケーション以外の何物でもないと感じています。

私は酪農学園短大9期、大学1期の卒業生であり、私を酪農経営者へ導いてくれた酪農学園の恩師の先生方々に、深い感謝の念と、卒業生である事に誇りを感じております。

「一粒の麦が地に落ちて死ななければ、それはただの一粒のままである。しかしもし死んだら豊かに実を結ぶようになる」(ヨハネ福音書12章24節)

酪農学園の前途に栄光あれ！と念じつつ…

「機農」10周年記念誌に投稿された文面の一部をご紹介します。

「私も酪農大学の卒業生」

東京大学名誉教授 細川 明

(元酪農学園大学教授)

東大では色々な事を学んだが、黒澤先生の「三愛主義」と樋浦先生の「教育哲学」(※註1)以上のことは何もなかった。むしろこの二つの宝を持つ故に多くの困難や苦難を乗り越える事が出来た。

酪農大学で学び、建学の精神を学び取らなかった人は、酪農大学を通過したお客さんであり、酪農大学のみが提供し得る大切な真珠をつかみ損ねた事になるだろう。酪農大学の強雨教職員も学生もこの精神に生き、この精神で教え、この精神で学び続けてほしい。もし酪農学園が建学の精神を失うなら看板に偽りありで、香りを失って単なる田舎大学に落ちぶれてしまう事を懸念する。

(※註1) 教育とは単なる知識の伝達ではなく、学問を通して教師と学生の人格養成である。

2020年度の留学生支援について

酪農学園大学
社会連携センター国際交流課

横 川 容 子

2020年1月1日、当時カナダ出張中の教員から「インターネットニュースで、武漢市で原因不明の肺炎発生」との情報提供がありました。これが国際交流課が得た新型コロナウイルスの第一報でした。以降日本のみならず世界全体が新たな感染症との戦いに立ち向かっていくことになるとは、当時全く予想もしていませんでした。

国際交流課の業務は日本と世界をつなぐこと、人と人をつなぐことにほかなりません。それが突然断ち切られ、人と人はむしろ距離を取ることを求められるようになりました。国境は閉ざされ、人の往来が制限され、世界中で学ぶ多くの留学生も帰国を余儀なくされました。

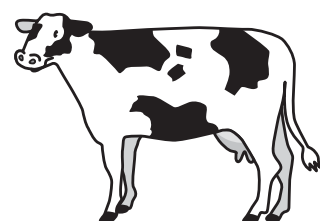
本学で学ぶ外国人留学生も多くの困難を抱えた一年になりました。生活状況のアンケートからは、次々とアルバイトの仕事が減らされ、中には全く仕事なくなり、留学生を雇ってくれる新たなアルバイト先もなかなか見つからない様子をはっきりと読み取れました。また自国の感染状況への懸念や航空機の大幅な減便、各国のとり入国後の隔離措置などで、ほとんどの留学生が帰省することが叶わず家族にも会えない日々が現在まで続いています。

例年国際交流課が留学生支援としてアジア酪農交流会のご協力を頂いて実施してきた留学生バスツアー

も、実施について多くの議論と検討が重ねられました。バスという密な空間で、普段はほとんど一堂に会することがない留学生同士と一緒に談笑し、時にはそれぞれの国の歌を披露し合い、北海道や日本の文化を学び、一緒に食事をするという、楽しいことの一つ一つが感染拡大のリスクを含んでいるからです。残念ながら集団でバス移動をすること、どこかを訪問すること、皆で食事をするについては断念せざるを得ませんでした。

しかしそれに替わる新たな企画として、亀岡副センター長にご協力いただいてオンラインでのセミナー、そして学内で密にならない空間に集まったの留学生交流会を初めて実施することができました。一年近く家族にも会えずにじっと耐えてきた留学生たちと、また半年以上の長い入国待機を得てようやく入国できた新入生も交えて、久しぶりに留学生同士が顔を合わせることができました。吉中センター長から、普段困っていることはないか、やりたいこと（バスツアーで行きたいところなど）は何かなど、留学生に自由に発言してもらおうと、「アルバイトがなくなって大変だった」「サークル活動もできなくなって、交流ができない」「バスツアーでは何かを見るだけでなく、活動（果物狩りなど）もやりたい」「余市に行ってみよう」など、活発な意見が出ました。この状況が終息した暁にはこれらの意見を活かして、また国際交流課として少しでも留学生が充実した大学生活を送れるように、これからも支援の方法を考えていきたいと思っています。

今後とも本学で学ぶ留学生へのご支援、ご協力をどうぞよろしくお願いいたします。



留学生交流会の実施報告

農食環境学群 循環農学類
社会連携センター副センター長

亀岡 笑

2021年5月5日

本学では留学生の交流を図るイベントとして、例年であれば道内バスツアー等が企画されていた。しかし昨今のコロナ感染状況をみると、このような直接的な交流イベントの実施は極めて難しい状況である。かといって貴重な留学生交流の場をなくすことは避けたい、という気持ちから、2020年度に関してはオンラインセミナーならびに学内会議室での交流会、という形で留学生交流の場を設けることとした。

本稿では、このような経緯で2021年2月15日に実施された留学生交流会について報告する。

オンラインセミナーの詳細内容は亀岡が担当する循環農学類2年生向けの講義「作物栽培学(第14回)」の内容(下記参照)とした。

1. グルテン
2. コムギの起源と伝播、分類
3. コムギの国内・国際事情
4. コムギの栽培方法(生理・形態とあわせて)
5. 緑の革命

【参考】 GAP: 持続可能な農業を目指して

コムギはそのバラエティーに富んだ性質を生かし、様々な加工品へととなって世界中で愛されている。コムギをテーマとして据えた場合、単に教員から情報発信するだけにとどまらず、利用法に関して留学生との情報交換が期待できると考え、本テーマ設定を決めた。

セミナー当日時点で、本学には計7か国26名の留学生が在籍していた。

セミナー当日は、Google Meetを用いてリアルタイムで3名の留学生が本セミナーを視聴した。当日視聴者は全体からみれば少ない参加となった一方で、セミナー配信直後は時間をオーバーするほどに情報交換が盛り上がった。社会連携センターの横川

課長、品川さんをはじめ、吉中センター長からも聴講参加ならびにサポートいただき、留学生にとって発言しやすい環境が形成されたと感じた。情報交換内容としては、留学生の母国地域でのコムギ取り扱い区分(日本ではグルテン含有量に応じて薄力粉、中力粉、強力粉、の区分がある)や、母国地域で特に好きなコムギ料理とその理由などがあった。このディスカッションは大変興味深く、私自身もコムギに関してひとつ知識が深まったと感じた。

セミナーの様子はGoogle Meet内の機能によって録画され、当日参加できなかった留学生が各自で都合の良い時間帯にセミナーを聴講できるシステムとした。情報交換を目的として作成されたセミナー内容に関するアンケートには、当日参加の3名を含めた計24名の留学生が回答した。アンケート項目は以下のとおりであった。

1. セミナーを聞いた感想
2. 母国での麺料理を教えてください
3. 今後実施したい交流イベントについて
4. 今困っていること
5. 希望するサポート

アンケート回答への取り組みは想定していた以上に充実したものであった。「1. セミナーを聞いた感想」では好意的な意見が多くみられ、話題提供者の立場からしても、自身の専門性をこのような形で活用できることを嬉しく感じた。また、「2. 母国での麺料理を教えてください」への回答結果からは、コムギの海外利用に関して有益な知見を得られた。

「3. 今後実施したい交流イベントについて」では、半数程度の学生から交流イベントに関する提案があった。例年のようなバスツアー等の企画を希望する声もあれば、「留学生同士で話す機会がほしい」といった声も複数あげられた。今回のようなオンラインセミナーも含め、留学生同士が会話をできる機会自体は我々の工夫によって設けることができ、そこにニーズもあることが実感できた。

「4. 今困っていること」、「5. 希望するサポート」に関しては今回ほとんど意見がなかったが、日本語学習や生活面のサポートを希望する回答が確認できた。

オンラインセミナー聴講ならびにアンケート回答を終えた留学生には、後日2月25日に受講証明書と生協で使える利用券（コロナ等踏まえた生活サポートの一環）が吉中社会連携センター長より贈呈された。

この日はコロナ対策を万全にしたうえでソーシャルディスタンスが確保できる広い会議室に、社会連携センターメンバーならびに16名の留学生が参加した。普段なかなか一堂に会する機会がない留学生たちの自己紹介から始まり、今年度の授業や生活の状況、来年度以降バスツアーで行きたい場所ややりたい交流内容など、留学生の話を直接聞く良い機会となった。皆それぞれ今年度は様々な苦労や困難がありながらも、元気に過ごしてきた様子を知ることができ、今年度入学した留学生や、修了・帰国予定の留学生など、久しぶりの対面での交流に留学生たちも終始和やかな雰囲気では進んだ。

アンケート項目の「3. 今後実施したい交流イベントについて」でみられたような「留学生同士で話

す機会」を提供でき、貴重な交流の時間になったと感じた。

留学生交流として、今回のオンラインセミナーは初めての試みであったが、交流に関しても一定の成果を挙げられたのではないだろうか。まだまだ感染状況も落ち着かない日々が続くような状況ではあるが、できることを工夫して実施していくことが重要であると再認識した。本学において、留学生がひとつでも前向きに学びに向かい合うことができるよう、今後も国際交流課では、留学生同士が交流できる機会を提供していきたい。

注：本文は、社会連携センターでの以下記事内容も参考に作成した。オリジナルの記事もぜひ参考されたい。

トピックス：留学生交流会を開催しました（掲載日：2021年3月1日）

<https://exc.rakuno.ac.jp/archives/5344.html>



図1. セミナー受講証明書授与式での自由な情報交換の様子

図2. セミナー受講証明書授与後の集合写真



日本留学の目的

獣医学研究科獣医学専攻博士課程3年

NUMPADIT SUPAPORN

日本文化を通して初めて日本のことを知ったのは筆者が高校生の時、それが日本語を勉強するきっかけとなりました。その後、大学生時代にはタイの大学で選択科目として日本語を勉強していました。そうするうちに、自分の日本語能力を向上したいという思いと、日本の獣医学ではどんな授業をするか、どんな世界だろうかという興味を強く持つようになり、機会があったら日本に留学して獣医学を学びたいと思うようになりました。そして大学6年生の時に酪農学園大学で3ヶ月間交換留学しました。留学中には腫瘍学に興味を持っていたので、腫瘍科で勉強することにしました。その時数多くの症例を間近で見て、様々な治療法や診断方法を目の当たりにして、日本の獣医療はタイより進んでいるということを感じました。さらに、一番感動したのは熱心で素晴らしい日本の先生方です。そのことがきっかけで酪農学園大学大学院の獣医臨床腫瘍科で博士課程を修めようと決めました。

2017年にタイで学部を卒業して、約1年半タイの動物病院で臨床獣医師として小動物の診療を経験しました。そして、2019年に酪農学園大学大学院に入学し、現在は大学院での悪性黒色腫に関する研究をしています。2019年から研究と並行して臨床症例のデータを収集するため、附属動物医療センター腫瘍科の診療に参加しています。2019年10月には上海で行われた獣医学会にて犬22例における未分化及び分化型の線維肉腫に対する上顎・下顎切除の予後についてポスター発表を行いました。

博士論文の研究テーマは、犬の悪性黒色腫に対する治療法です。その治療法の中でも、ウイルスを用

いた抗腫瘍ウイルス療法に着目しています。犬では、口腔内の悪性黒色腫が最も多く発生し転移しやすい特徴があり治療も困難です。現在の治療法は外科治療、放射線療法が主流です。最近、免疫療法などの補助療法も応用されるようになりましたが、未だ発展途上です。この様に、悪性黒色腫の問題点は、腫瘍転移率が高く、手術だけでは完治が困難なことから、新しい治療法を検討する必要があります。

抗腫瘍ウイルス療法は、細胞溶解性ウイルスが腫瘍に感染することで、感染した腫瘍が溶解することにより腫瘍細胞の消失と免疫細胞を誘導することを目的とした治療法です。この治療法に用いるウイルスはこれまでいくつかありましたが、筆者の研究では現在研究室で展開しているパラミクソウイルスの病原性をなくし腫瘍感染性を維持した組換え弱毒ウイルスを用いています。このウイルスは、腫瘍細胞に感染しやすく、感染細胞は溶解します。その際に、宿主の免疫機能を活性化するため腫瘍を排除する細胞性免疫を誘導し、腫瘍の転移を抑制することが期待されます。

このウイルスを犬由来の腫瘍に応用し、犬の悪性黒色腫治療に応用するための基礎研究を進めています。現在は、臨床症例由来の悪性黒色腫の初代培養を試み、すでに数株の細胞を樹立しています。今後は、この細胞株数を増やすことと、組換えウイルスを用いて腫瘍溶解性の検討を進めて、悪性黒色腫に対するウイルス治療の効果を検討していく予定です。基礎検討の後に、マウスを用いた動物実験段階展開することが近い将来の課題です。

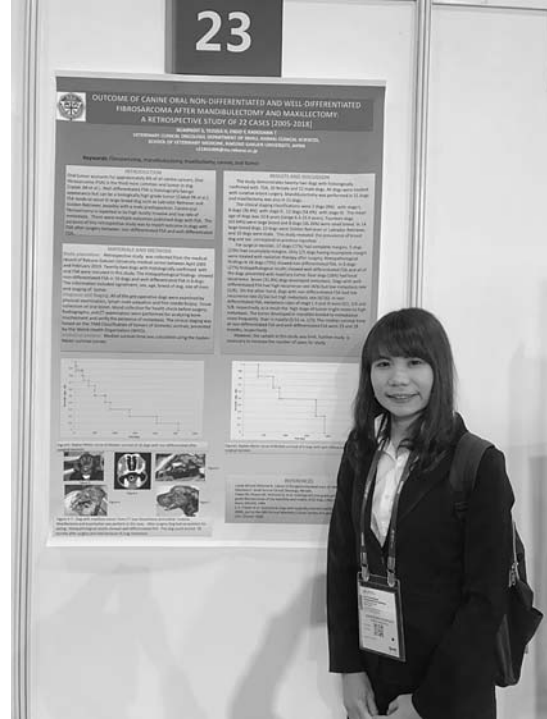
現在のタイの獣医療は世界各国と比較すると多くの分野が発展途中であり、中でも高度な外科技術を持つ外科専門医や腫瘍の診断治療に精通する腫瘍科専門医は多くありません。卒業後、タイの大学の動物病院腫瘍科にて勤務し、日本で得た腫瘍における臨床及び研究の知識を生かして、母国に貢献したいと考えております。またタイに帰国後はアジア獣医外科専門医を取得し、さらに日本の新しい知見を常

に取り入れるなどタイと日本の架け橋となる獣医師になるため、今年に日本語能力試験1級取得、来年

の日本獣医師国家試験合格を目指します。



初浴衣



第6回 AMAMS (Asian Meeting of Animal Medicine Specialties) 2019



日本での思い出と 頑張っていること

農食環境学群食と健康学類3年

YALEGEMU

私は内モンゴルの小さな都会で生まれて、子供の時によく草原に行って遊んでいました。その時、羊や牛などの家畜と触り合うことができるととても楽しかったです。自分は日本に来て薬剤師や酪農家になりたいくて、一生懸命頑張って日本に来ましたが、薬剤師がなりにくく、食品に関する勉強をすることにしました。最初、酪農学園大学にした理由は、酪農学園大学で家畜に関する実習や勉強ができることと食品開発について深く勉強することで酪農学園大学に入りました。実習で子供の頃から憧れていた家畜の仕事ができ、牛の健康診断や育ち方について身につけました。酪農学園大学に入った時、初めて日本人の友達ができしたのは少林寺拳法部です。自分は少林寺拳法部で日本の礼儀やルールについていっぱい

学びました。先輩と後輩の関係や持ちつ持たれつが一番大切だとわかりました。特に、北海道大会に向かって、合宿をしていた時、朝早めに起きて、後輩としてみんなの料理を作り、掃除をします。そして、朝練が終わったら授業に集中して、空いている時間で動きの練習をします。夜に組手の練習や動きの練習などをして、聖句や信条を覚える必要があって、とても苦労しました。練習中はOBOGがいらっしやり、みんなに技を教えてくれ、マッサージなどをしてくれます。また、少林寺拳法の50周年記念祝賀会で酪農学園大学のOBに会って、いろんなことを教えてくれました。祝賀会でみんな一緒に酪農学園大学の讃歌を歌い、大家族みたいな感じがしました。いっぱい思い出を残しました。少林寺拳法部で頑張ってきた精神でこれから日本でどんな困難にも立ち向かうようになりました。これからも勉強のことでサークルで頑張っていきたいです。日本でのサークルはみんな真面目にやって大会やコンサートなどを行い、日本人が本当に真面目だとわかりました。大学を卒業しても日本で美味しく、健康な食品を作り、社会に貢献して行きたいと思います。





将来の目標

獣医学群獣医保健看護学類3年

LIN PAO CHUN

私は一流の動物看護師になり、臨床獣医療現場に活躍できるようになるために、日本に留学しに来ること決めた。私にとっての一流の動物看護師は獣医師をサポートし診療をスムーズに行えるようになる役割であると思っている。診療をスムーズに行えるためには、動物の保定などの看護知識はもちろん、薬物や手術器具の知識も覚えておかないといけなく、獣医師が指示する前に、これからの診察に使用する可能性のあるものを用意し、求められた時に素早く提供できる環境を整えるのも我々看護師の仕事であると考えている。

また、診療が始まる前に、飼い主にペットの生活環境、食事などの情報をできる限り詳しく聞き、質問票を作ったり、飼い主の質問を答えたりするなどの受付、待合室での対応でも看護師の仕事の1つで、医療に関する業務であれば何でも上手く完成できる看護師だと私が考えている。

卒業後はまず小動物の動物病院に就職したいと思っている。昔から臨床獣医療に関する仕事に憧れがあるので、症状を見て病気を判断したり、手術に参加したりするなどの診療をしてみたかったのである。

動物病院で接客、経営に関するのを学びながら、経験を積み、店を開ける資金を稼ぎ、将来自分のペットホテルを経営したいと思っている。しかし、普通のペットホテルではなく、動物病院と提携し、術後の入院や入院検査の犬猫でも対応できるペットホテルを経営したいと考えている。

私の理想のペットホテルは、宿泊エリアと入院エリア2つに分けている。宿泊エリアの部屋は小、中、大3種類があり、犬猫の体型により、適切な大きさの部屋を提供する。ドッグランは室内と室外があり、普段室内で生活しているペットが快適に過ごせるスペースと、外で遊ぶことが好きなペットが快く遊べるスペースを用意する。また大型犬でも十分に運動できるように、ドッグランをやや大きめに作りたいと思っている。入院エリアでは、順調に回復できるように、外が見え、簡単な運動ができる入院室を作り、入院中の犬猫のストレスを少しでも減らし、圧迫感のない入院室を整えているペットホテルを作るのは私の夢である。





学類犬のトレーニングを行う時



2019年度愛護フェス：粘土で犬たちの足型を保存する企画



2019年度愛護フェス：集合写真



ノースサファリサッポロ

○2019年度の留学生バスツアー (2019/10/26)

2019年の主な事業

天候に恵まれた2019年10月26日(土) アジア酪農交流会および大学社会連携センター国際交流課の共催による留学生対象のバスツアーが例年同様に開催された。

参加者は総勢29名。目的地は小樽市内にある硝子製品手作り体験が可能な「il Ponte」。9時40分に本学を出発し、高速札幌道で一路小樽へ。車中では参加者全員の自己紹介が行われた。横川国際交流課長の流暢なバイリンガルでのガイドで1時間弱の行程で目的地に到着。

記念撮影ののち、早速担当者の指導も下、サンドブラストを約1時間体験。いろいろなサンプルデザインから切り抜き作業等を行い、マイグラスを完成させた(月曜日の28日には社会連携センターに工房で加工された完成品が届き、個々人に配られました。)

その後は小樽散策の自由行動ののち1時に小樽を出発して札幌ビール園に向かった。札幌ビール園到着後、改めて記念写真撮影が行われた。その後「ポプラ館」において懇親昼食会が行われた。懇親会はアジア酪農交流会の主催で行われ、発地会長の乾杯で始まり、約1時間半の和やかな昼食会となった。

最後に、このツアーは酪農学園後援会の後援を頂戴しておりますことに紙面をお借りしてお礼申し上げます。

(アジア酪農交流会HPより)



(札幌ビール園にて)



(小樽市「il Ponte」にて)

アジア酪農交流会 2019～2021年度決算報告

2019年1月1日～2019年12月31日

| | | | |
|------|-------|-----------|---|
| 収入 | 前年繰越金 | 750,016 | 円 |
| | 寄助金 | 156,000 | 円 |
| | 交流金 | 200,000 | 円 |
| | 利息 | 94,500 | 円 |
| | その他 | 2 | 円 |
| | 合計 | 1,200,518 | 円 |
| 支出 | 交通流会費 | 329,887 | 円 |
| | 原信田賞 | 29,998 | 円 |
| | 印田刷費 | 18,360 | 円 |
| | 図書寄贈 | 152,900 | 円 |
| | 雑慶費 | 25,740 | 円 |
| | その他 | 3,240 | 円 |
| | 合計 | 10,000 | 円 |
| 収支決算 | 収入 | 1,200,518 | 円 |
| | 支出 | 580,125 | 円 |
| | 収支差額 | 620,393 | 円 |

2020年1月1日～2021年12月31日

| | | | |
|------|---------|---------|---|
| 収入 | 前年繰越金 | 620,393 | 円 |
| | 寄助金 | 68,000 | 円 |
| | 交流金 | 300,000 | 円 |
| | 利息 | 2 | 円 |
| | 合計 | 988,395 | 円 |
| 支出 | 振替払出 | 220 | 円 |
| | 通信費 | 440 | 円 |
| | H P 維持費 | 75,350 | 円 |
| | 慶吊 | 10,000 | 円 |
| | 合計 | 76,010 | 円 |
| 収支決算 | 収入 | 988,395 | 円 |
| | 支出 | 76,010 | 円 |
| | 収支差額 | 912,385 | 円 |

2021年1月1日～2021年12月31日

| | | | |
|------|--------|---------|---|
| 収入 | 前年繰越金 | 912,385 | 円 |
| | 交流金 | 13,000 | 円 |
| | 利息 | 5 | 円 |
| | 合計 | 925,390 | 円 |
| 支出 | 交流会 | 15,000 | 円 |
| | 振替払出 | 550 | 円 |
| | H P 維持 | 110 | 円 |
| | 費 | 3,850 | 円 |
| | 慶吊 | 10,000 | 円 |
| | 合計 | 895,880 | 円 |
| 収支決算 | 収入 | 925,390 | 円 |
| | 支出 | 29,510 | 円 |
| | 収支差額 | 895,880 | 円 |

2022年1月1日～2022年9月30日

| | | | |
|------|---------|---------|---|
| 収入 | 繰越金 | 895,880 | 円 |
| | 利息 | 8 | 円 |
| | 合計 | 895,888 | 円 |
| 支出 | H P 維持費 | 3,850 | 円 |
| | 振替払出 | 110 | 円 |
| | 合計 | 3,960 | 円 |
| 収支決算 | 収入 | 895,888 | 円 |
| | 支出 | 3,960 | 円 |
| | 収支差額 | 891,928 | 円 |

寄付者ご芳名

(2019.5.23～2019.12.31)

中原 准一 小貫 満子 名久井 忠 高陽 鍾律 中尾 敏彦 黒澤 淳子 金川 牧場
 原田 綾子 関 あずさ 武田 哲男 小野 武二三 福田 昭夫 細田 治憲 永田 享

(2020.1.1～2020.12.31)

小貫 満子 盧 金 鎮 林 満 細田 治憲 井澤 敏朗 酪農学園後援会

(2021.1.1～2022.9.30)

小貫 満子 井澤 敏朗

アジア酪農交流会 2019年度事業報告

アジア酪農交流会の集い

2019/5/22

総会

原田賞 (1名)

永田 亨氏 (酪農学園後援会常務理事)

講演 11:30～

講師：小林 紀彦氏

演題：都市近郊の酪農経営

～小林牧場の取り組み～

昼食・懇談会 (軽食) 12:00～13:30

会報 (通信43号) の発行

2019/9/30

留学生バスツアー

2019/10/26

小樽市運河倉庫街

サッポロビール園

雑誌の寄贈

インド：三浦照男氏 (本会理事)

アジア酪農交流会役員 (2022~23年度)

| | | | | | | |
|------|--------|-----------|----------|------------|--------|--------|
| 名誉会員 | 金 奉柱 | 尹 汝昌 | | 菊地 創 | 三谷 耕一 | 小山 久一 |
| 顧問 | 坂本 与市 | 細田 治憲 | 牧野 一穂 | 星野 仏方 | 發地 喜久治 | 金子 正美 |
| | 仙北 富志和 | 安宅 一夫 | 中原 准一 | 高井 久光 | 小林 紀彦 | 上原 恒一郎 |
| | 山田 実 | 柳 監永 | | 鈴木 正 | 鈴木 善人 | 藤本 達也 |
| | 嘎 尔迪 | V.I.グレビッチ | | 佐藤 寛晃 | 浦川 利幸 | 福田 昭夫 |
| 会長 | 押谷 一 | | | Palle Hoej | ダナ・パティ | 田村 健一 |
| 副会長 | 河野 崇治 | 井下 英透 | 小糸 健太郎 | 梅原 健二 | 早坂 悟 | 野 英二 |
| 理事 | 艾尼瓦尔艾山 | 崔 一信 | 孫 鏞錫 | 泉 賢一 | | |
| | 胡 尔查 | 梁 信喆 | アイヌル・エズム | 監 事 | 加藤 勲 | 上野 光敏 |
| | 盧 金鎮 | 林 翰群 | 玉 柱 | 事務局長 | 土井 和也 | |
| | 朝 格图 | 孫 啓忠 | 三浦 照男 | 会 計 | 石塚 研太 | |

*** 編集後記 ***

2020年2月の「さっぽろ雪まつり」後の新型コロナウイルス感染拡大に伴い北海道に独自の「緊急事態宣言」が発出された。これ以降、社会生活において活動自粛が余儀なくされました。アジア酪農交流会の活動においても恒例の「交流会の集い」、「留学生とのバスツアー」等の各種交流会が自粛し、未開催に致しました。

通信の発行も手つかずのまままで今日に至りました。通信の発行については、多くの方々から、コロナ禍の下でも発行せよとのご意見を頂戴しておりました。そこで、今回は、一昨年に酪農学園大学社会連携センター主催の留学生への特別授業を担当していただいた亀岡 笑先生および留学生の方々に投稿をお願いいたしました。昨年度に発行する通信に載せる予定でしたが、都合により通信の発行は今回にまで延び延びとなりました。ここに、深くお詫び申し上げる次第です。なお、通信は2019年43号までの発行となっていますので、今回の通信は、2020・2021・2022年の合併号(44・45・46号)として発行いたしました。

2022年5月に三役会を開催し、役員体制を新たに編成いたしました。従来から、会長は酪農学園大学の現職教員としていました。これに従い、發地喜久治氏は定年退職したため(酪農学園大学非常勤講師として勤められています)、押谷一氏をお願いいたしました。押谷氏も定年になりましたが、非常勤講師として酪農学園大学と関わっており、長年アジア酪農交流会の理事として本会の運営に尽力頂いている方です。また、新たに酪農学園大学教授 泉 賢一氏は理事、同大助教 土井和也氏は事務局長に就任いたしました。皆様のご協力のもと、新役員体制で本会を運営してまいります。これより、新体制でアジア酪農交流会を運営してまいります。今後とも、ご支援、ご協力の程、よろしくお願いたします。(野)

アジア酪農交流会規約

第1条 この会はアジア酪農交流会と称し、本部事務局を北海道江別市文京台緑町・酪農学園大学におき、必要に応じて支部をおく。

第2条 この会はアジア諸国の農学並びに農村振興に関心をもつ人々の友好親善を促進し、併せて青年農学徒の育成に協力することを目的とする。

- 第3条 この会は目的達成のために次の事業を行う。
1. アジア諸国の酪農に関する情報交換。
 2. 酪農青年の交換研修に対する物心両面での援助。
 3. 講習会、講演会、視察会等の開催。
 4. その他。

第4条 この会の目的に賛同する個人及び法人は何人でも会員になれる。
なお、会員は金額の多少を問わず、寄附金の義務を負う。

第5条 会員の中から互選により、会長、副会長、理事

及び監事をおく。

役員は、理事会により選出され、任期は2年とする。ただし、再任をさまたげない。

また、理事会の審議により名誉会長、名誉会員、顧問をおくことができる。

第6条 本会の事業は、毎年1月1日から12月31日までとし、経費は、寄附金その他をもって充当する。なお、予算・決算の審議は理事会によって行う。

第7条 本会は、設立者原田勇の業績を顕彰し、原田賞を設ける。表彰者は本会の目的に対する功績者とし、その規定は別途定める。

- 補 則 この規約の変更は理事会で行う。
- 1975年10月18日 発足総会において決定。
 - 1976年2月17日 一部改正。
 - 1995年7月31日 一部改正。
 - 2006年6月5日 一部改正。
 - 2013年8月21日 第7条追加。